



## APM 准教授 齊藤 広晃

### ・専門分野：

ホスピタリティマネジメント、  
サービスマネジメント、  
組織心理学と行動論

### ・科目：

人材と組織行動のマネジメント、  
グローバルマネジメント、専門演習

2021年10月時点

Q: 先生の授業の中で、最も工夫をされている科目はどの科目ですか？

A: 僕は授業計画の中でも、組織行動論の授業により多くの時間をかけています。組織行動論の授業は APM の必修科目なので、他の先生たちと教える内容を一致させなければいけません。基本的には教科書に沿って進めていきますが、学生に身近な例をたくさん使うようにしています。例えば、杉乃井（ホテル）やジョイフル（レストラン）など、多くの学生たちがアルバイトをしている接客業や会社を実例にします。それは、学生たちが授業で学んだ理論や概念を実生活に結びつけることができなければ、その概念はすぐに忘れ去られてしまうという考えからです。

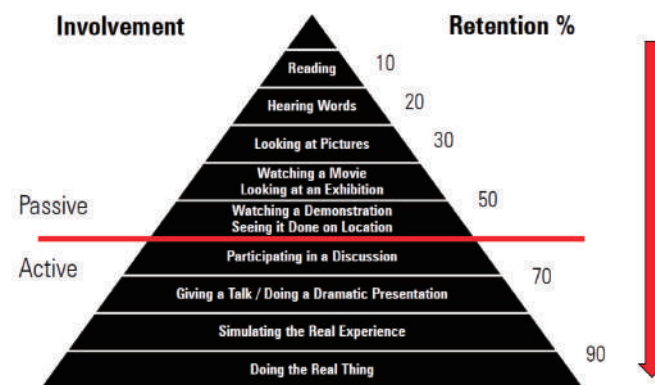
Q: 先生の授業で、学生の学びの質を高めるために、どのような工夫をされていますか？

A: 僕は、100 分間の授業の間ずっと話し続けることはしません。その代わりに、各セッションの時間を 2 つのサブセッションに分けて授業をします。前半は「Passive Learning」と呼んでいる普通の講義で、後半は「Active Learning」です。前半では、僕が概念や理論を学生に教えます。後半は、ブレイクアウトルームなどを利用してグループディスカッションやチームプロジェクトを行ったり、ゲスト講師に講義をしてもらったりしています。その時間は学生たちが前半で学んだ概念や理論を応用したりするアクティビティを用意しています。このような参加

# Tips

1. 「マイク・ポリシー」を使い、ランダムに学生を選び授業で発言させる
2. 100 分間の授業を 2 つのパートに分けて、概念や理論のインプット、理論の実践をアウトプットとする。
3. ゲスト講師を招いて、学生・産業界・卒業生を結びつける。

How will we use 'Learning Pyramid' in this course



型の活動が、セッションの半分を占めているのが能動的学習です。僕は、インプット（教えること）からアウトプット（活用）ができなければ、せっかくのインプットもすぐに失われてしまうと考えています。多くのアウトプットをする機会を作ること、学生が授業で学んだ知識をより深く理解し、定着させるよう心がけています。

**Q: 先生の授業で、学生の学びのモチベーションを高めるために工夫されていることはありますか？**

**A:** 僕の授業では、様々な企業からゲスト講師を招いており、学生に課題を出してもらっています。例えば、コロナ禍において自社がどのように対応しているのか、

残された課題は何なのかなどについてゲスト講師が話し、学生たちはその課題の対応策を自分たちで考え、ビデオを作成します。課題が終わったら、上位 5 つのプロジェクトを選んで、ゲスト講師の企業に送っています。その後で、企業はビデオを見てコメントを送ってくれます。人材マネジメントの授業では、全てのセッションで「APU 卒業生」をゲスト講師として招きました。結果、学生たちは業界の視点を学べるだけでなく、例えば実際の企業（アマゾンジャパンや日本信号）で働いている卒業生に出会えます。一方でこういった取り組みは、卒業した先輩が APU に戻り、業界で学んだことを後輩に伝えることも良いことだと思います。このように、業界と学生、卒業生と学生をつなぐことで、学びやモチベーション、

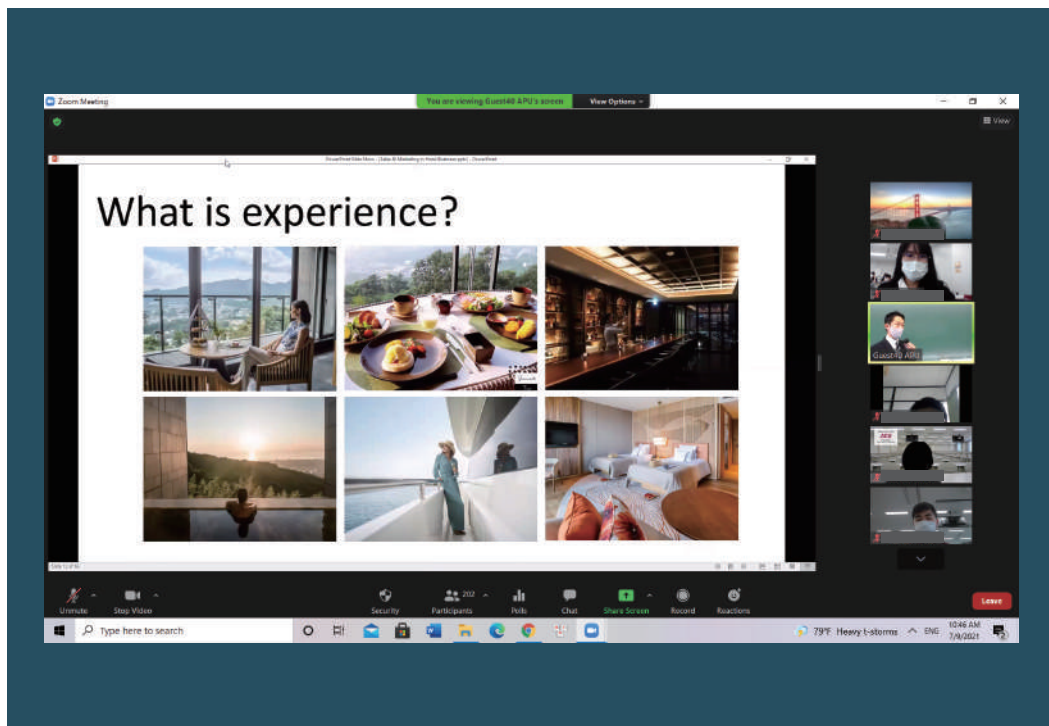
そして全体的な経験値を向上させています。

**Q: 2020 年の春セメスターからオンライン授業が行われましたが、オンラインで授業を行う上でどのようなことを変更しましたか？**

**A:** 僕のクラスは基本ハイブリット型の授業です。1 人の TA が対面で授業に参加している学生に対応し、もう 1 人の TA がオンラインに参加している学生に対応をしています。TA が講義内容を正確に理解し、セッションをよりうまく運営できるようにするために、授業の前に毎回 TA と一緒にリハーサルをしています。授業中は、TA がブレイクアウトルーム入り、創造性や革新性を刺激するような

コメントをしています。

また、僕のクラスでは、「マイク・ポリシー」というものを行っています。オンライン授業が導入される前は、TA が学生たちにランダムにマイクを渡して学生に出す問いに答えてもらっていました。現在は、Zoom のミュート解除機能で代用しています。ハイブリット型の授業では、対面で参加した学生とオンラインで参加した学生の両方にマイクポリシーを適用しています。指名された学生がマイクを使って質問に対する回答を共有する間、対面の学生もオンラインの学生も、いつでも Zoom のチャットボックスに自分の回答を書くことができます。そうすることで、誰でも自分のアイデアを僕に伝える機会を持つことができます。



授業中、効果音も用います。例えば、学生が正解した場合、学生が良い回答をした場合、学生が緊張している場合、などに効果音を使っています。これらの効果音は、学生が集中力を失わずに継続的に授業に参加する上で効果的です。特に、複雑な概念を教える時には、こういったエンターテイメントの要素がとても重要だと思っています。

**Q: 先生が授業内容を改善する時に、どのようなステップで改善を行われていますか？**

**A:** 講義の冒頭で学んだ理論や概念を、講義外でも使えるように実践することに時間を費やしています。先ほど述べたように、僕は 100 分の授業を前半と後半に分

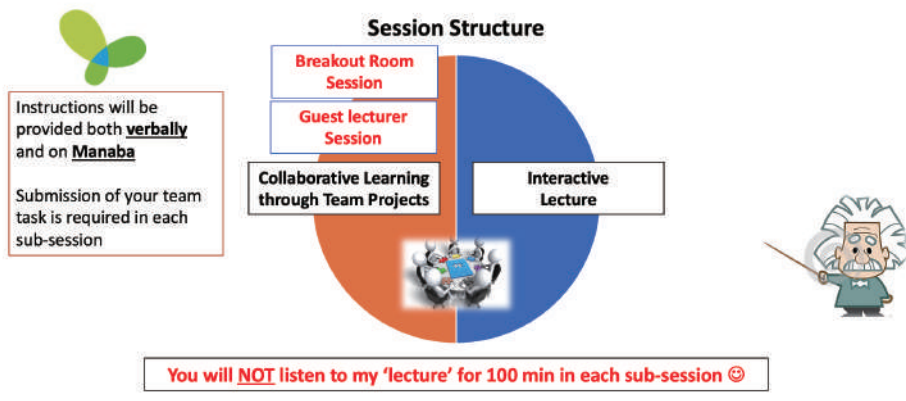
けています。前半は、学生たちにモチベーション理論などの概念や理論をインプットしてもらいます。そして後半は、その理論を実践してもらいます。例えば、理論を実践してもらうために、「この文脈や状況下で、あなたならどうやってやる気を出させますか？」というような質問をします。そして、前半の講義に基づいた解決策を考え、それをクラス内課題として提出してもらいます。

学生にやってもらうアウトプットの別の例ですが、以前、職場でのストレスとその因果関係について講義をしたことがあります。このような場合、企業ができることは X-Y-Z であり、休憩室を有効活用しようとするところも多いと説明しました。その講義の後半では、休憩室をより



## 14 Sessions

How will we use the time in each session?



良い環境にするにはどうしたら良いか、ストレスの回復のために十分な休養を取るための休憩室を各自デザインしてもらいました。コーヒーマーカーやソファ、テレビなどを追加してもらいながら。また、なぜそのような選択をしたのか、それらのアイテムがどのようにストレスの回復や休養に関係するのかを説明してもらいます。

**Q:** 先生が教育をおこなう中で大切にしていることは何ですか？

**A:** 教室で学んだことは学生の人生に関わることなので、いかに学生の心に「知的関心の種」を植え付けていくかが重要だと思っています。そうすることで、教室

内で得た知識は、教室外・私生活にも広がり、生徒の人生に直接影響を与えることも少なくありません。

「失敗」という概念を取り除くことも大切です。失敗を学習のための「踏み台」にするかどうかは、学生本人次第です。例えば、ある課題でB(評価)をもらったとしても、何が悪かったのか、そのミスから何が学べるのかを考え、それを次に生かすべきだと思っています。僕は、「何が悪かったのか」といった否定的な表現ではなく、いつも「どうやったら改善できるかを考えてほしい」と学生たちに伝えています。学びがないところには進歩はありません。

**Q:** 授業を受ける学生に期待することは何かありますか？

**A:** 僕の授業では、授業に対する積極性を重視しています。そのために、いつも「海賊船」を例に挙げています。教室は一つの船で、教員は船長。僕の役割は船長として指示を出したり、方向を決めたりはしますが、船は動かせません。では誰が船を動かすのか・・・学生たちです。彼らが主体的に授業に参加し、チームワークでの取り組み、学びを発揮することが、船を進めるためには決定的要素です。それをリマインドさせるために、僕はいつも講義の最初に「パイレーツ・オブ・カリビアン」のテーマ曲を流しています。その音楽を毎回用いることで、「これから

君たちはクルーとして船に乗りこむ」とリマインドさせるのです。また、僕は学生たちを「学生」とは呼ばず、「クルー」と呼んでいます。これら一つひとつはすべてシンプルですが、一貫した一つのメッセージを送っています。『学生たち一人ひとりの本当の意味での積極的なクラス参加が、意味のある Journey (学び) を14週間で作り上げる』これが僕の教育哲学でもあります。



# インタビューの感想

ヒロ先生は、授業にゲスト講師を積極的に招いています。「学んだことを現実の世界で応用する」、ということを実際に経験したいと思っていたので、この点が特に印象に残りました。教室で習った理論や概念が現実に適用されていることを学生が知ることは重要です。私のような現役の学生にとって、APUの先輩方にお会いして、インスピレーションを得られるお話を聞くと、実際の現場の様子を知ることができます。今回のインタビューから、ゲスト講師を招くことは、授業を楽しくするための最良の方法の一つであり、ヒロ先生はこのような学生を惹きつけることの重要性を知っていることが分かりました。

# インタビュアー



名前：ロレッニジ・ケリー  
学部：APS (ED)  
出身：マーシャル諸島  
メッセージ：ヤッコエ（こんにちは）！  
2年の環境・開発専攻のケリーと申します。旅行とウクレレを引くことが大好きです。これらの記事から、各読者がそれぞれの教授によって提示された教授法からいくつかの重要な知識を得ることを願っています。

記事翻訳：CHOI Eunkyong

# 「Q」とは

APUで素晴らしい授業を行っている先生方はたくさんいらっしゃいますが、先生方が授業中にどのような工夫をしているのか知ることが出来れば、他の先生の授業改善にも役立つ。そのために、インタビューをして授業の工夫を教えてください、ということで始めた取り組みです。この記事は、授業の「Quality=質」を高める、質を高めるための「Question=問」に答える、授業改善の「Queue=列」をなす、など、色々な意味を込めて「Q」と名付けました。先生方の授業の質向上の「Quest」に役立てられると幸いです。

